

前回私たちは、パウロとその一行が、マルタ島において約三ヶ月間を過ごした後、そこから再び出帆し、間もなくローマに到着したのを見ました。ローマ到着後、パウロは、番兵付きで自分だけの家に住むことが許されたわけですが、それは囚人の身としては例外なことであるといえます。親衛隊の百人隊長ユリアスの取り計らいがあったのかも知れません。いずれにしても、エルサレムに向かう前、「私はそこに行つてから、ローマも見なければならぬ」(19:21)と語つたパウロですが、彼のその願いは、「あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかししなければならぬ」(23:11)という主の約束通り、実現へと至つたわけです。

さて、ローマに到着したパウロは、三日の後、ユダヤ人のおもだつた人たちを呼び集め、自分がローマに来た理由を彼らに告げます。17-20節「兄弟たち。私は、私の国民に対しても、先祖の慣習に対しても、何一つそむくことはしていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に渡されました。18 ローマ人は私を取り調べましたが、私を死刑にする理由が何もなく、私を釈放しようと思つたのです。19ところが、ユダヤ人たちが反対したため、私はやむなくカイザルに上訴しました。それは、私の同胞を訴えようとしたのではありません。20 このようなわけで、私は、あなたがたに会つてお話ししようと思ひ、お招きしました。私はイスラエルの望みのためにこの鎖につながれているのです」。

このように語つたパウロに対して、「自分たちは、ユダヤから何も知らせを受けていない」ということ、つまり、「ローマに来たユダヤ人たちの中で、パウロについて悪いことを告げたり、話した者はいない」、と彼らは答えました。ただ、パウロが宣べ伝えている「この宗派」としてのキリスト教については、至る所で非難があることを彼らは知つていたわけです。それゆゑに、パウロから直接、話を聞くことを彼らは願ひました。21-22節に記されていることです。

そこで彼らは、日を改めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやってきましたが、その彼らに対して、パウロは朝から晩まで語り続けた、といひます。皆さん、パウロは何について語つたのでしょうか？ 23節の後半、「神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした」。このことは、言い換へると、20節の「イスラエルの望み」といふことができます。皆さん、イスラエルの民は、何を望みとしていたのでしょうか？それは、メシヤの到来です。そして、その方による神の国の実現を彼らは待ち望んでいました。

実に主イエスは、その約束のメシヤとして来られたわけですが、エルサレムのユダヤ人たちは、そのことを認めず、かえつて神を冒瀆する者として主を罪に定め、十字架にかけて殺してしまつたのです。ところが、主イエスは、弟子たちに語つておられた通り、三日目に墓の中からよみがえられました。そして、40日もの間、弟子たちに現れた後、天に昇り、約束の御霊をペンテコステの日に弟子たちに注がれたのです。その神（聖霊）の力によって弟子たちは、エルサレムを始め、ユダヤとサマリヤの全土、および、当時の世界の中心であつたローマにまで主を証するに至りました。

パウロは、これらのことをローマに住むユダヤ人の指導者たちに、モーセの律法と預言者の書から、つまり、旧約聖書から説明したわけですが、その中心は、主イエスのこと、つまり、彼が神様をして聖書を通してイスラエルに約束されていたメシヤである、ということだつたのです。そして神の国、つまり、神様の恵みによる支配は、この方によって、彼を信じるすべての者のうちに（その心のただ中に）もたらされ、やがては天の御国に入られることで、その救いの完成を見るゆゑに、主イエスを信じるよう、彼らを説得しようとした。

パウロが語つた内容については、そこまで細かく記されていないわけですが、でもこれまで見て来たように、また彼の書いた手紙からわかるように、パウロは、神の国と、主イエス・キリストのことをそのように聖書から説明したのです。しかも、それを朝から晩まで続けたということですから、私たちは、そのように理解して良いと思ひます。では、このように語つたパウロのことばに対して、人々はどのように応答したのでしょうか？ 24節「ある人々は彼の語る事を信じたが、ある人々は信じようとしなかつた」。

私たちは、この使徒の働きのメッセージ・シリーズを2017年の初めから見てきましたが、これが主の福音を聞いた人々の応答でした。つまり、ある人々は信じ、でも、ある人々は信じようとしなかったのです。私たちとしては、すべての人に信じてほしい、と願うわけですが、悲しいことに、これが現実といえます。でもここで気をつけたいこと、それは、このことが理由となり、または言い訳となって、私たちが主を証することを止めてしまうことです。つまり、誰が信じるかわからない、すべての人が信じるわけではない、ということを経験した私たちは福音を語らない理由にははいけません。主イエスを信じて、その心に神様の恵みを受けている人は、この方のすばらしさを証せずにはおられないからです。

このような彼らの応答を見、そして彼らが互いに一致せずに帰りかけたので、パウロはイザヤ書のことばを引用してこう語りました。25-27節「…聖霊が預言者イザヤを通してあなたがたの父祖たちに語られたことは、まさにそのとおりでした。26『この民のところに行って、告げよ。あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。27 この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、その目はつぶっているからである。それは、彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟って、立ち返り、わたしにいやされることのないためである』」。

このことばは、イザヤ書6章9-10節からの引用ですが、実は主イエスも、このことばを引用して語っておられます。特にマタイ(13:14-15)、マルコ(4:12)、ルカ(8:10)といった共観福音書において、主は「種まきの譬え話」との関連の中で、このことばを使われました。「ご自分がたとえをもって話すのは、人々が悟らないためだ」と。このことばというのは、これを聞く人に混乱を生じさせるものだと思います。なぜなら、私たちの考えでは、たとえというのは、それを通して聞く人に、話の内容、その意味をわかりやすくするためのものだからです。悟らせないためではなく、悟らせるためです。

主イエスは、またパウロも、なぜこのことばを引用したのでしょうか？それは福音を聞いても信じようとしなない人々に嫌味を言うためですか？この預言のことばをもって、信じない彼らを断罪し、滅びを宣告するためでしょうか？そのように受け止めようと思えば、それも可能かも知れません。でも私は思うのです。それは、このように語ることで、彼らが心の鈍い者であるということ、つまり、罪人として、主の声を聞かず、そのわざを見ようとしなない人々の現実を暴くことで、何とかして彼らを悟らせるためであったと。そうでなければ、このように言うことで、それが何の助け、誰の助けになりますか？

皆さん、どうかこのことばを自分自身に当てはめて考えて見て下さい。あなたは、主のみことばを聞いて悟っていますか？それをしっかりと理解しているのでしょうか？あなたは目で見ているものが、何であるのか、それが主のみわざであることがわかっていますか？あなたは、自分の心が決して鈍くないと言い切ることができずか？年を重ねることで、肉体の耳は遠くなっても、自分の心の耳は遠くない、この肉体の目は悪くなっても、心の目は開いていると確信をもっていえますか？

パウロは、主のことを聞いても、信じようとしなない人々に、このイザヤのことばを引用しましたが、そのすぐ後の28節でこう語るのです。「ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは耳を傾けるでしょう」。主の救いは、この時すでに異邦人たちに向けられていました。これまで見て来たように、実に多くの異邦人たちが、主の福音に耳を傾け、実際に、その救いにあずかっていたのです。そして、この後も、異邦人たちは救われ続けます。そして、私たち自身もその中に含まれるわけです。

では、どうですか？ここでパウロが意味したこと、それは異邦人ならだれもが、福音が語られさえすれば、みな耳を傾けるということでしょうか？もっと言うと、異邦人だからという意味において、人々は主イエスを信じるようになるのですか？いいえ。ユダヤ人、異邦人に関係なく、そこには信じる人がいれば、信じようとしなない人がいるのです。ただ確かなことは、私たちはみな、アダム以来、人の中に入ってきたその罪ゆえに、みな心の鈍い者、聞いても悟らず、見てもわからない者であるということです。それゆえに、誰も自分から悟って主に立ち返る者はいません。

にも関わらず、私たちは今、主イエス・キリストを知っており、彼によって神様の恵みの支配を心に受け、やがて、神の国の完成を見ることを待ち望んでいるわけです。なぜですか？なぜ心の鈍い、自己中心な私たち

が、そのように主イエスとこの方のすばらしさを知ることができているのでしょうか？マタイの福音書を見ると、そこでは主がイザヤのことばを引用した後、弟子たちにこう語っておられます。マタ 13:16 「しかし、あなたがたの目は見ているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです」。これは、ご自分のこと、つまり、主は神の国をもたらすメシヤとして来られたご自分を指してこのように言われたのです。

では、どうですか？皆さんの中で、弟子たちのように、その目で主を見、その耳で主の声を直に聞いたという人はいますか？いないでしょう！ではなぜ、私たちは今日、主イエスを救い主と信じ、神の国を待ち望むだけでなく、それに生かされているのですか？それはただ主のあわれみ、恵みによります。主が私たちの心を開き、耳を開いて、ご自分のことをわかるようにして下さったからです。すでに主を信じる者たちを用いて、みことばと御霊をもって、ご自身を現して下さったからです。その主の働きかけがあって、その恵みに対する応答としての私たちの信仰があります。このことがいかに主のわざ、御力によるかがわかりますか？

30-31 節、「こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた」。「あれ？これでこの手紙は終わってしまうの？」と、この終わり方にじっくりこない方もおられるかも知れません。この後、パウロはどうなってしまったのか？と気になる方もおられることでしょう。結局、パウロは、二年後に釈放されます。というのも、ここでも有罪とされるような罪が見出されず、またユダヤ人たちもそれ以上訴えることをしなかったからです。ちなみに、このローマでの二年の間に、パウロは、エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモンへの手紙を書いたと考えられています。

釈放されたパウロは、テモテやテトスへの手紙といった牧会書簡の中で見られるような活動をしたと言われますが、数年後に再び捕らえられ、ついに皇帝ネロのもとで殉教の死を遂げたと伝えられています。皆さん、著者のルカは、これで使徒の働きを書き終えるわけですが、彼がパウロの死をもってではなく、このように「大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた」といって終わったのには、意味があるはずですよ。

どうぞ思い出して下さい。使徒の働きが始まった時、主の福音はまだエルサレムの中でも広がっていませんでした。それがエルサレムを越えて、近隣の国々に広がっただけではなく、当時の世界の中心であったローマにまで及んでいったのです。それはもちろんパウロを始め、主を信じる者たちが福音を語ったためですが、それは私たちの常識を遥かに超えています。人間的に考えるなら、それは不可能なことと言えるでしょう。でも、それがこの世を愛し、ご自身の愛する御子を与えられた父なる神様の御心であったゆえに、主イエスのことは、主が約束された通り、世界中で証されて行ったのです。

福音を語るために、パウロは多くの困難と苦しみの中を通りました。そして、それは私たちにおいても同じことがいえます。私たちは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったからです（ピリ 1:29）。でも、この世におけるいかなる困難や苦しみも、主イエスにある神様の愛から、私たちを引き離すことはできません。誰も、主の救いのご計画をストップすることはできないのです。「私たち」ではなく、「主」がしっかりと私たちを捕らえて下さっているからです。

ですから、私たちは、罪や自分の弱さ、足りなさを、このお方に従わない理由としてはいけません。主は、私たちがどのような者かをよくご存知の上で、ご自分のからだを引き裂かれるため、またその尊い血を流すために十字架にかかり、その贖いの死を成し遂げて下さったからです。私たちを罪と悪魔の支配から、ご自分の恵みのもとへと、滅びからいのちへと移して下さいのためです。私たちは、このお方を、主イエスご自身をどこまでも求めようではありませんか。主イエスのことを知れば知るほど、この方のすばらしさ、その救いのすばらしさを語らずにはおられない、黙ってははいられないようになるからです。